

青年期における性役割形成についての研究

A Study of Gender – Role Formation in Adolescence

芳 田 茂 樹
Shigeki YOSHIDA

緒 言

一般に青年期は、人間の発達の段階において児童期から成人期へ移行する過渡期として位置づけられている。世間では、まだ一人前の人間としておとな社会に属してはいないが、かといって親の支配下にあった子ども社会からは、もう巣立ってしまっている存在なのである。つまり、心理的に安定した児童期から徐々におとなへと移行する時期である。しかし、現代においては青年期が拡大してしており、単に発達の視点のみならず社会生活上でも種々の問題をはらむ重要な時期とみなされている。発達心理学的にみるならば、青年期の基本的特徴として、第二性徴、自我のめざめ、人間関係の拡大などがあげられる。

Erikson, E. H. (1959)¹⁾によれば、青年期は自我同一性の確立される時期であると定義づけられている。それによると、乳・幼児期から児童期までの間に個人は、周囲の人々との様々な感情的関係を経験し、その関係の中で成長・発達に必要な事柄を学びとっている。ところが、青年期になると自分自身へ反省的な意識が向けられるようになる。自分自身に鋭い眼が向けられてみると種々の人々から影響された多様な特性があり、どれが本当の自分なのか混乱する。青年は、児童期までに確立した人格を試行錯誤を繰り返しながら再構成しなおす。そして、再構成された自己をEriksonは「同一性」と呼んだ。

青年期は、同一性確立への努力と役割拡散への傾向の葛藤によって特徴づけられる時期であり、その葛藤を乗り越えて同一性を確立していくことが人格形成の中心的課題と考えられる。このような同一性の確立は、自分が「男であること」また「女であること」の認識をその基本的な構成要素として包含しており、それ故性役割同一性の確立もその中心的な課題の一つであるといえる。

福富 (1983)²⁾は、性役割が形成される過程を2つに分けて考えた。その第1段階は、児童期を中心にした青年期以前の段階であり、人間形成にとって必要とされる基本的な諸特性が形成される時期である。第2段階は、思春期から青年期にかけてであり、これまでに獲得されてきた基本的特性を基盤にして、より主体的な価値を内在させて人格形成がなされる時期である。児童期までの性役割形成は、社会が期待する性役割について受動的に形成していく段階であり、青年期はそれら児童期までに形成された行動レベルでの「性的型づけ」を自我意識の確立とともに文化や社会の文脈の中で主体的に変容させ、性役割を自

青年期における性役割形成についての研究

己概念や自我同一性の一部として確立させることであるとした。

稲垣 (1970)³⁾は、性役割とは文化の中で性別によって適切とみなされる行動特性、パーソナリティの特徴である。すなわち性差に基づいて社会から期待され、また自己が知覚した役割であると定義づけ、また柏木 (1973)⁴⁾も性役割とは、社会 (文化) から性に応じて期待される一連のパーソナリティ特性、つまり性に対する社会的役割期待であると性役割を定義づけた。しかし、男女間において性役割に違いがみられる。これが性差であり、性役割の前提には性差があると考えられる。性差は2つの次元からとらえることができ、一方は生物学的性差つまり生殖機能を含む男女の身体的・生理的な差であり、他方は心理・社会学的性差すなわち生物学的性差に根ざし社会化の過程を通して文化社会の期待する「男らしさ、女らしさ」という性役割ステレオタイプの習得結果とみなされる性差とに分けることができ、生物学的性差が先天的に決定されるのに対して、心理・社会学的性差は後天的に発達を通して出現するものである。

井上 (1986)⁵⁾は、性役割尺度は従来男子性－女子性を単一次元上の両極とみなして測定されてきたが、同一次元上で測定するよりはむしろ下位特性のスコアによるプロフィール表示の方が適切であり、また男子性、女子性は人間性の中に内在する二面として考えるべきであるとした。性役割は、男子性 (Masculinity) と女子性 (Femininity) と呼ばれ、その頭文字をとりM－F scaleとしてテストされてきた。M－F scaleは、多数の男女を対象にテストを実施し性差のみられる項目だけを取り出して尺度とする方法で作成されたものと「男らしい」「女らしい」と思われている特性とはどのようなものを成人男女に直接質問することにより男子性、女子性のステレオタイプを収集する方法で作られるものの2種類がある。

これら従来のテストでは、M－Fテストの結果男子性の高い男性および女子性の高い女性が理想的であると考えられてきた。またステレオタイプな男性像と大きな差異のある男性は、「男らしくない」というだけでなく「女っぽい」と評価されることになったのである。しかし、Constantinople, A. は従来のM－Fの一次元二極性を批判し、男性役割と女性役割は異なる基準で計られるべきものであるとし、男子性が低いことが女子性が高いことを意味するのではなく、逆に女子性が低いことは男子性が高いことを意味するのではないことを主張した。このような経過をへて、M－F scaleは、従来の一次元的なものから男性役割と女性役割を別次元のものとして考え作成されるようになった。

Bem, S. L. (1974)⁶⁾は、人間には両性性的存在すなわち男性性と女性性との両方をあわせもっており、状況に応じて男性的であったり女性的であったりすることができる場合があること、また強く性別化している人間は、状況に対応して取りうる行動の範囲が限られているという2つの仮説をたてた。この仮説をもとに作成されたのがBem Sex-Role Inventory (BSRI) である。BSRIは、表1に示すように各20項目からなる男性尺度と女性尺

度及び中性尺度の計60項目から構成されている。男性尺度、女性尺度はそれぞれの性度に関しての獲得程度を測るものであり、中性尺度は性度に関しては完全にニュートラルな社会的望ましき尺度（Social Desirability scale）である。BSRIは、60項目について7段階評定尺度法で現実の自分にいかにあてはまるか自己記述させることで全体的な性役割を測定しようとした。その結果から、人間はその性役割同一性の獲得のレベルにより4タイプに分類することができる。4タイプとは、未分化（無性性）：Undifferentiated、女性性：Feminine、男性性：Masculine、両性性：Androgynousであり発達の位層をなすものと考えられる。

表1 BSRIの男性項目、女性項目、中性項目（Bem, S. L., 1974）

Masculine items	Feminine items	Neutral items
49. Acts as a leader	11. Affectionate	51. Adaptable
46. Aggressive	5. Cheerful	36. Conceited
58. Ambitious	50. Childlike	9. Conscientious
22. Analytical	32. Compassionate	60. Conventional
13. Assertive	53. Does not use harsh language	45. Friendly
10. Athletic	35. Eager to soothe hurt feelings	15. Happy
55. Competitive	20. Feminine	3. Helpful
4. Defends own beliefs	14. Flatterable	48. Inefficient
37. Dominant	59. Gentle	24. Jealous
19. Forceful	47. Gullible	39. Lovable
25. Has leadership abilities	56. Loves children	6. Moody
7. Independent	17. Loyal	21. Reliable
52. Individualistic	26. Sensitive to the needs of others	30. Secretive
31. Makes decisions easily	8. Shy	33. Sincere
40. Masculine	38. Soft spoken	42. Solemn
1. Self-reliant	23. Sympathetic	57. Tactful
34. Self-sufficient	44. Tender	12. Theatrical
16. Strong personality	29. Understanding	27. Truthful
43. Willing to take a stand	41. Warm	18. Unpredictable
28. Willing to take risks	2. Yielding	54. Unsystematic

Spence, J. T., Helmreich, R., & Stopp, J. (1979)⁷⁾は、Rosenkrantz, B. S.らの作成したSex Role Stereotype Questionnaireを用いて大学生に一連の両極性特性について典型的男性像と典型的女性像及び理想的男性像と理想的女性像を評定させた。その結果、男女の典型的男性像と典型的女性像の評定で有意な差が認められた55項目を抽出してThe Personal Attributes Questionnaire (PAQ)を開発した（表2）。これら55項目は、18項目のfemale-valued scaleと23項目のmale-valued scale及び13項目のsex-specific scaleの3下位スケールに分類される。PAQは、MとFのどちらかのステレオタイプ特性を5段階評定することにより二極性次元で表され、M, Fの各スコアは評定値を合計することで算出される。その他、Heilbrun, A. B.なども性役割尺度を開発している。

青年期における性役割形成についての研究

Well, K. (1980)⁸⁾は、BSRIを用いて青年期男女を対象に心理学的両性と適応に関する問題を取り上げた。その結果、両性性的同一性と心理的適応の間に有意な関連があることが報告されている。さらに、女性にとっては高い男性性を、男性にとっては高い女性性をそなえることが社会的適応にとって重要であることを見出した。このことは、心理学的両性性を持った個人は、女性的あるいは男性的な個人よりも適応するというBemの一連の研究を支持している。他にもWaterman, A., & Whitbourne, S.K. (1982)、Prager, K.J., & Bailey, J.M. (1985) ともBSRIを用いて心理的両性性の問題を取り上げて研究している。しかし、BSRIにもPAQにもまだ改善すべき点があり、今後も研究されるべきである。

表2 PAQのmale-valued項目, female-valued項目, sex-specific項目

(Spence, J. T., et al 1979)

male-value item	female-valued item	sex-specific item
1. Independent	24. Emotional	42. Aggressive (M)
2. Not easily influenced	25. Not hide emotions	43. Dominant (M)
3. Good at sports	26. Considerate	44. Like math. and science (M)
4. Not excitable, minor crisis	27. Grateful	45. Excitable, major crisis (F)
5. Active	28. Devotes self to others	46. Home-oriented (F)
6. Competitive	29. Tactful	47. Mechanical aptitude (M)
7. Skilled in business	30. Strong conscience	48. Needs approval (F)
8. Knows ways of world	31. Gentle	49. Feelings hurt (F)
9. Adventurous	32. Helpful to others	50. Cries easily (F)
10. Outspoken	33. Kind	51. Loud (M)
11. Interested in sex	34. Aware, other feelings	52. Religious (F)
12. Makes decision easily	35. Neat	53. Sees self-running show (M)
13. Not give up easily	36. Creative	54. Needs for security (F)
14. Outgoing	37. Understanding	
15. Acts as leader	38. Warm to others	
16. Intellectual	39. Likes children	
17. Self confident	40. Enjoys art and music	
18. Feels superior	41. Expresses tender feelings	
19. Takes a stand		
20. Ambitious		
21. Stands up under pressure		
22. Forward		
23. Not timid		

以上、青年期のパーソナリティ形成を性役割の概念を中心に展望してきた。そこで本研究は、青年がパーソナリティを形成していく中でその中心的課題の1つでもある性役割の獲得様相を分析・検討するのが目的である。特に性役割測定については、Bemの考案したBSRIを日本に適用することの可能性についても検討する。

【 方 法 】

1. 調査対象

被験者は、大阪府下にあるO学院大学大学生男子162名、女子120名、合計282名であった（表3）。学部・学科は特定しなかった。また、学年についても1回生から4回生までにわたっている。

2. 調査用紙

先述のBemが作成したBSRIを筆者自身が邦訳し使用した。BSRIは、表1に示したように男性性（masculinity）尺度20項目、女性性（femininity）尺度20項目、中性性尺度（社会的望ましさsocial desirability）尺度20項目の計60項目から構成されている。

被験者には、5段階評定尺度法で現実の自分にいかにあてはまるか自己記述させた。その結果、各個人の男性性スコア、女性性スコアを得点化し、さらに社会的望ましさスコアも算出する。

性役割スコアについて、個人の男性性スコア、女性性スコアはともに20から100の中に位置づけられる。両スコアの高得点と低得点の境界は60とした。平均値や中央値で分類する方法も考えられるが、それらによる分類を採用すると男女間に差がみられるため、男女差を抹消するため20から100の midpointである60を基準とした。そして、男性性スコアが61以上のものを「M+」、60未満のものを「M-」、女性性スコアも同様に61以上のものを「F+」、60未満のものを「F-」とした。60ちょうどのものは、どちらにも属さないのを省いた。

個人の性役割は、男性性スコアと女性性スコアの組合せから「M+, F+」（Androgynous）、「M+, F-」（Masculine）、「M-, F+」（Feminine）、「M-, F-」（Undifferentiated）の4タイプのいずれかに割り当てられる。このようにして分類した4タイプは、個人の全体的性役割の性質を特徴づけるものである。

3. 調査実施方法

調査の実施方法は、集団一斉法によった。実際には筆者自身が教示者となり講義時間を利用し、一斉に被験者に調査用紙を配布し所要時間約20分～25分で反応させ、回収した。

4. 調査時期

調査時期は、1987年7月と10月であった。

5. 資料の整理

回収した資料の中から、各項目に完全に回答したもののみを資料として採用した。除外したものは、明らかに不面目な態度で回答したと思われるもの、回答で項目に脱落のあるものなどである。その結果、有効データ数は男子157名、女子114名、合計271名であった（表3）。

青年期における性役割形成についての研究

表 3 被験者数及び有効DATA数

	被 験 者	有効DATA
男	162	157
女	120	114
計	282	271

【 結 果 】

1. 男子について

表 4 は、男子全体の性役割尺度についての平均値と S D 値である。男性性スコアは、60.34、女性性スコアは66.94、社会的望ましさは61.30であった。この結果から、女性性が男性性よりも高い値を示している。

表 4 男子の性役割尺度についての平均値とSD値

	Male	
N	157	
	Mean	SD
Masculinity	60.34	11.25
Femininity	66.94	9.16
Social Desirability	61.30	9.19

1-1. 男子の性役割同一性について

男子157名の性役割尺度に基づいて、性役割 4 タイプに分類した結果が表 5 に示されている。A ndrogynousは57名、M asculineは14名、F eminineは64名、U ndifferentiatedは11名であった。それぞれの平均値を比較すると、M asculineを除いて女性性スコアの方が男性性スコアよりも高い値を示している。また、4 タイプで比較してみると男性性スコアにおいては、M asculine、A ndrogynous、F eminine、U ndifferentiatedの順であり、女性性スコアにおいてはA ndrogynous、F eminine、U ndifferentiated、M asculineの順であった。A ndrogynousは、相対的に高い値を得ているのに対し、U ndifferentiated は相対的に低かった。

表 5 男子。性役割 4 タイプの平均値とSD値

	Androgynous		Masculine		Feminine		Undifferentiated	
N	57		14		64		11	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Masulinity	70.09	7.53	70.29	5.27	52.34	4.90	44.64	5.69
Femininity	71.58	6.24	51.79	6.74	69.33	5.50	52.09	8.14
Social Desirability	65.16	8.11	54.57	9.23	60.88	7.82	53.18	12.25

次に、4 タイプ間のそれぞれについて性役割スコアの平均値の比較を行った。表 6 は、A ndrogynousとM asculineの性役割尺度の比較の結果である。女性性スコアで0.1%水準で

大手前女子学園（大手前女短大研集）「研究集録」第9号（1989年）

有意にAndrogynousが高く、また社会的望ましさにおいても1%水準で有意にAndrogynousの方が高かった。表7は、AndrogynousとFeminineとの結果である。この表から男性性、女性性、社会的望ましさの3スコアともにAndrogynousの方がFeminineより有意に高いことがわかった。表8は、MasculineとFeminineの性役割についてt検定を行った結果である。それによると、男性性スコアにおいては、Masculineの方が0.1%水準で有意に高いが、女性性スコアにおいては、Feminineが0.1%水準で有意に高い。社会的望ましさにおいては、5%水準で有意にFeminineが高い。UndifferentiatedとAndrogynous, Masculine, FeminineそれぞれのTypeとの性役割尺度の比較の結果が、表9、10、11である。これらの表からAndrogynous、Masculineとは、男性性スコア、女性性スコア、社会的望ましさとともにUndifferentiatedの方が有意に低いことが示されている。Masculineとは、男性性スコアのみUndifferentiatedの方が低い、女性性スコア、社会的望ましさでは差はみられなかった。表12は、男子における性役割スコア間の相関を示したものであるが、女性性と社会的望ましさにおいては1%水準で、男性性と社会的望ましさにおいては5%水準で有意に高い相関を示したが、男性性と女性性においては相関はみられなかった。

表6 男子。AタイプとMタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Masculine		t	F
N	57		14			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	70.09	7.53	70.29	5.27		
Femininity	71.58	6.24	51.79	6.74	***	
SocialDesirability	65.16	8.11	54.57	9.23	**	

$p < .01 = **$, $p < .001 = ***$

表7 男子。AタイプとFタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Feminine		t	F
N	57		64			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	70.09	7.53	52.34	4.90	***	***
Femininity	71.58	6.24	69.33	5.50	*	
Social Desirability	65.16	8.11	60.88	7.82	**	

$p < .05 = *$, $p < .01 = **$, $p < .001 = ***$

表8 男子。MタイプとFタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Masculine		Feminine		t	F
N	14		64			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	70.29	5.27	52.34	4.90	***	
Femininity	51.79	6.74	69.33	5.50	***	
Social Desirability	54.57	9.23	60.88	7.82	*	

$p < .05 = *$, $p < .001 = ***$

青年期における性役割形成についての研究

表9 男子。AタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Undifferentiated		t	F
N	57		11			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	70.09	7.53	44.64	5.69	***	
Femininity	71.58	6.24	52.09	8.14	***	
Social Desirability	65.16	8.11	53.18	12.25	*	**

p<.05 = *, p<.01 = **, p<.001 = ***

表10 男子。MタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Masculine		Undifferentiated		t	F
N	14		11			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	70.29	5.27	44.64	5.69	***	
Femininity	51.79	6.74	52.09	8.14		
Social Desirability	54.57	9.23	53.18	12.25		

p<.001 = ***

表11 男子。FタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Feminine		Undifferentiated		t	F
N	64		11			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	52.34	4.90	44.64	5.69	***	
Femininity	69.33	5.50	52.09	8.14	***	*
Social Desirability	60.88	7.82	53.18	12.25	▲	*

p<.1 = ▲, p<.05 = *, p<.001 = ***

表12 男子。性役割スコア間の相関

	Masculinity	Femininity	Social-D
Masculinity	☆		
Femininity	.1555	☆	
Social Desirability	.3368 *	.4175 **	☆

p<.05 = *, p<.01 = **

2. 女子について

表13は、女子全体の性役割尺度についての平均値とSD値を示したものである。平均値は、男性性スコア59.65、女性性スコア65.50、社会的望ましさスコア61.82であり、男子と同様に男性性スコアよりも女性性スコアの方が高い値を示している。

2-1. 女子の性役割同一性について

女子について性役割4タイプに分類した結果が表14である。表14に示したようにAndrogynousが41名、Masculineが9名、Feminineが39名、Undifferentiatedが19名となった。性役割の4タイプについての平均値を比較すると、Masculineを除く3タイプで男性性スコアよりも女性性スコアの方が高い得点を示している。また、男性性スコアについて4タ

イプを比較すると、高い方からMasculine、Androgynous、Feminine、Undifferentiatedの順になり、女性性スコアにおいてはAndrogynous、Feminine、Masculine、Undifferentiatedの順であった。社会的望ましさににおいては、Androgynous、Masculine、Feminine、Undifferentiatedの順である。Androgynousは、全てにおいて相対的に高い値を得ているのに対し、Undifferentiatedは全てにおいて一番低い。

表13 女子の性役割尺度についての平均値とSD値

	Female	
N	114	
	Mean	SD
Masculinity	59.65	10.40
Femininity	65.50	9.28
Social Desirability	61.82	8.60

表14 女子。性役割4タイプの平均値とSD値

	Andrigynous		Masculine		Feminine		Undifferentiated	
N	41		9		39		19	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
Masculinity	69.17	6.33	69.56	6.45	52.69	5.60	49.37	4.80
Femininity	70.78	6.53	54.78	4.39	69.18	6.42	54.00	4.79
Social Desirability	66.07	6.06	63.11	4.86	62.03	7.74	53.47	10.02

次に、性役割4タイプそれぞれの間の平均値をt検定により検討する。表15は、AndrogynousとMasculineの性役割についてt検定を行った結果である。それによると女性性スコアにおいては、0.1%水準で有意にAndrogynousが高い値を示しているが、男性性スコアと社会的望ましさににおいては有意差はみられなかった。AndrogynousとFeminineの性役割についてt検定を行った結果（表16）、男性性スコアにおいて0.1%水準でAndrogynousの方が有意に高く、社会的望ましさににおいて5%水準で有意にAndrogynousが高い値を示したが、女性性スコアにおいては、有意差はみられなかった。表17は、MasculineとFeminineについてt検定を行った結果である。男性性スコアについては0.1%水準で有意にMasculineの方が高い値を示したが、女性性スコアにおいては0.1%水準で有意にFスコアが高かった。社会的望ましさにについては、有意差はみられなかった。女子のUndifferentiatedとAndrogynous, Masculine, FeminineそれぞれのTypeの平均値の比較をした結果が表18、19、20である。これらの表からUndifferentiatedは、Androgynous、Feminine、と比較すると男性性スコア、女性性スコア、社会的望ましさを全てで有意に低い得点を示したが、Masculineと比べると男性性スコア、社会的望ましさでは有意に低い、女性性スコアでは差がみられなかった。表21は、女子における性役割尺度間の相関を示したものであるが、男性性スコアと社会的望ましさ間、女性性スコアと社会的望ましさ間において

青年期における性役割形成についての研究

1 %水準で有意に高い相関を示している。男性性スコアと女性性スコアとの間には相関はみられなかった。

表15 女子。AタイプとMタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Masculine		t	F
N	41		9			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	69.17	6.33	69.56	6.45		
Femininity	70.78	6.53	54.78	4.39	***	
Social Desirability	66.07	6.06	63.11	4.86		

$p < .001 = ***$

表16 女子。AタイプとFタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Feminine		t	F
N	41		39			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	69.17	6.33	52.69	5.60	***	
Femininity	70.78	6.53	69.18	6.42		
Social Desirability	66.07	6.06	62.03	7.74	*	

$p < .05 = *$, $p < .001 = ***$

表17 女子。MタイプとFタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Masculine		Feminine		t	F
N	9		39			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	69.56	6.45	52.69	5.60	***	
Femininity	54.78	4.39	69.18	6.42	***	
Social Desirability	63.11	4.86	62.03	7.74		

$p < .001 = ***$

表18 女子。AタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Androgynous		Undifferentiated		t	F
N	41		19			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	69.17	6.33	49.37	4.80	***	
Femininity	70.78	6.53	54.00	4.79	***	
Social Desirability	66.07	6.06	53.47	10.02	***	*

$p < .05 = *$, $p < .001 = ***$

表19 女子。MタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Masculine		Undifferentiated		t	F
N	9		19			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	69.56	6.45	49.37	4.80	***	
Femininity	54.78	4.39	54.00	4.79		
Social Desirability	63.11	4.86	53.47	10.02	**	▲

$p < .1 = \blacktriangle$, $p < .01 = **$, $p < .001 = ***$

表20 女子。FタイプとUタイプの性役割尺度についての平均値の差の検定結果

	Feminine		Undifferentiated		t	F
N	39		19			
	Mean	SD	Mean	SD		
Masculinity	52.69	5.60	49.37	4.80	*	
Femininity	69.18	6.42	54.00	4.79	***	
Social Desirability	62.03	7.74	53.47	10.02	***	

p<.05 = *, p<.001 = ***

表21 女子。性役割スコア間の相関

	Masculinity	Femininity	Social-D
Masculinity	☆		
Femininity	.1656	☆	
Social Desirability	.4673 **	.4953 **	☆

p<.05 = *, p<.01 = **

3. BSRIの因子分析結果

次にBSRI60項目を因子分析した結果を表22に示した。主因子法を用いて因子を抽出し、バリマックス回転を行った結果3因子を抽出した。各因子において因子負荷量.30以上の項目を取り上げて各因子を構成しているものとした。また、複数の因子に高い負荷がある項目については、負荷量のより高い因子における意味が大きいと考え、その因子を構成する項目とした。3因子の全体に対する寄与率は32.86%であった。

第1因子に負荷している項目として、「41.暖かい方である。」、「44.優しい方である。」「59.温和な性格である。」、「33.誠実である。」、「9.良心的である。」、「17.忠実である。」「23.同情的である。」、「39.好かれやすいタイプである。」など24項目である。

第2因子に負荷している項目としては、「49.リーダーとして行動する方である。」、「25.リーダーとしての能力を備えている。」、「13.自己主張的である。」、「46.積極的である。」「58.野心的である。」、「37.支配的である。」、「19.力強い方である。」、「21.頼もしい方である。」など22項目である。

第3因子に負荷している項目は、「12.わざとらしいことが多い。」、「14.おだてにのる方である。」、「24.嫉妬深い方である。」など10項目という結果を得た。

青年期における性役割形成についての研究

表22 BSRI因子分析結果

項 目		I	II	III	h ²
男性性項目	1.自力本願である	-.0855	-.4293	-.2633	.985
	4.自分の信念を曲げない	-.0467	-.3686	-.1947	.189
	7.独立心が強い	-.1067	-.4593	-.1279	.239
	10.スポーツマンタイプである	.3282	-.3585	.0457	.131
	13.自己主張的である	-.0589	-.6423	.0921	.425
	16.個性の強い方である	-.1609	-.4777	-.0315	.255
	19.力強い方である	.0287	-.5832	-.0461	.343
	22.考え方が分析的である	.0681	-.2549	.0308	.530
	25.リーダーとしての能力を備えている	.3340	.6494	.0695	.538
	28.危険を冒すことをいとわない	-.0017	-.3839	-.1592	.173
	31.意思決定が速やかにできる	.0233	-.5452	-.4265	.480
	34.人に頼らないで生きていけると思っている	-.1701	-.3834	-.0922	.184
	37.支配的である	-.0462	-.6065	.3201	.472
	40.男性的である	.0553	-.4604	.0379	.216
	43.はっきりとした態度がとれる	.0135	-.5159	-.4666	.502
	46.積極的である	.3461	-.6232	-.1609	.534
	49.リーダーとして行動する方である	.2354	-.7066	.0686	.559
	52.個人主義的である	-.2729	-.3097	.1457	.192
	55.競争心が強い	.0759	-.4322	.0655	.197
	58.野心的である	-.1458	-.6192	.1169	.418
女性性項目	2.従順な性格である	.5200	.2890	.2877	.437
	5.明るい性格である	.4182	-.4050	-.1947	.377
	8.はにかみやである	.0740	.1864	.3907	.529
	11.情愛細やかである	.5663	-.2114	.2475	.427
	14.おだてにのるほうである	.0477	-.2544	.5847	.409
	17.忠実である	.6113	-.0126	.0147	.374
	20.女性的である	.1277	.0868	.1113	.036
	23.同情的である	.5948	-.0037	.3806	.499
	26.他人の欲求に敏感である	.4447	-.2664	.1640	.298
	29.理解力がある	.4097	-.2737	-.3368	.356
	32.あわれみ深い方である	.5501	.0380	.3750	.393
	35.傷ついた心をすすんで慰める	.3673	-.2320	.1262	.205
	38.話し方が穏やかである	.4062	.1469	-.1347	.205
	41.暖かい方である	.7589	-.1651	-.0012	.603
	44.優しい方である	.7575	-.0383	-.1252	.591
	47.だまされやすい	.1787	.0533	.5124	.297
	50.子供のような性格である	-.1105	.0154	.2339	.067
	53.言葉使いが丁寧である	.3270	.0881	-.1212	.129
	56.子供好きである	.3434	-.1313	-.0530	.138
	59.温和な性格である	.7061	.1549	-.1529	.546
中性性項目 社会的望ましき項目	3.人の助けをよくする	.5888	-.1807	.1295	.396
	6.不機嫌なことが多い	-.3637	-.0230	.4397	.326
	9.良心的である	.6405	-.0425	.1405	.432
	12.わざとらしいことが多い	-.0711	.0342	.6114	.380
	15.幸せである	.3415	-.0962	-.1319	.143
	18.見通しが悪い方である	-.1699	.2138	.5308	.356
	21.頼もしい方である	.3067	-.5697	-.2443	.478
	24.嫉妬深い方である	.2216	-.0507	.5621	.368
	27.正直である	.4984	-.0706	-.1590	.279
	30.秘密主義である	-.0717	.0020	.2701	.078
	33.誠実である	.6838	-.0639	-.0522	.474
	36.自惚れの強い方である	-.0858	-.2411	.5195	.335
	39.好かれやすいタイプである	.5941	-.2777	-.2570	.496
	42.まじめである	.5475	.0799	-.0139	.306
	45.友達つきあいがよい	.5318	-.3294	-.1742	.422
	48.能率が悪い	-.0770	.3412	.4569	.331
	51.融通がきく方である	.3857	-.2475	-.2219	.259
	54.筋道立てて考えられない方である	-.1582	.1588	.3309	.160
	57.気転のきく方である	.3238	-.4267	-.3088	.382
	60.保守的である	.2882	.3374	.1928	.234
寄与率 (%)		13.67	11.66	7.53	32.86

【 考 察 】

1. 性役割について

まず、男女大学生の性役割同一性について考察してみる。

性役割4タイプに分類した結果が表7、表14に示されている。それによると男女ともAndrogynous、Feminineの人数が多く、Masculine、Undifferentiatedが少ない結果を得た。

Bem, S.L. (1977)⁹⁾の大学生の分布結果と本研究の結果の分布が表23に示されている。Bemの結果との比較からも本研究では男女ともAndrogynous、Feminineが多く分布している。特に男子のFeminineの割合が非常に高く、Masculineが少ないことが顕著である。

表23 大学生の性役割同一性分布でのBemとの比較

	Bem	本研究
男子	(n = 375)	(n = 146)
Androgynous	21%	39.0%
Masculine	37%	9.5%
Feminine	16%	43.9%
Undifferentiated	27%	7.6%
女子	(n = 290)	(n = 108)
Androgynous	29%	38.0%
Masculine	16%	8.3%
Feminine	34%	36.1%
Undifferentiated	20%	17.6%

また、アメリカの大学生よりも男女ともUndifferentiatedの割合が少ないことも判明した。すなわち、男子では、性役割の両性性的同一性をもつものと、女性性（異性性）的同一性をもつものが多く、女子では、両性性的同一性と女性性（同性性）的同一性をもつものが多かった。そこで、4 Typeの男性性スコア、女性性スコア、社会的望ましさの平均値からさらに検討してみると、男性性スコアでは、男女ともUndifferentiatedよりFeminine、FeminineよりAndrogynous・Masculineの平均値が高い。男子の場合、女性性スコアではMasculine・UndifferentiatedよりFeminine、FeminineよりAndrogynousが、女子ではUndifferentiatedよりMasculineが、MasculineよりFeminine、FeminineよりAndrogynousの平均値が高くなっている。また、社会的望ましさにおいて男子は、Undifferentiated、Masculine、Feminine、Androgynous、女子ではUndifferentiated、Feminine、Masculine、Androgynousの順に平均値が高い。

このことから明らかに言えることは、性役割の3スコアにおいてUndifferentiatedの得点よりも有意にAndrogynousが高いことである。得点が高いほど性役割の同一性が獲得されていると考えるならば、UndifferentiatedからAndrogynousへと発達すると推察できる。また、社会的望ましさの平均値の順をみると男女とも無性性的同一性、同性性的同一性、異性性的同一性、両性性的同一性となる。つまり、社会的望ましさを含めた性役割形成は、

青年期における性役割形成についての研究

無性性的同一性からまず同性性的同一性を獲得し、次に異性性的同一性、そして最後に両性性的同一性を獲得していくのではないかと推察できる。但し、同一年齢層で測定した性役割の人数分布、及び尺度の平均値からだけでは、性役割発達の様相を明確に把握することはできなかった。また、Bemの結果の人数分布との差違は、単に文化的差違であるだけでなく、尺度自体にも問題があるものと考えられる。

2. 因子分析結果について

BSRI60項目の回答に基づき因子分析を行った結果を男性性、女性性、社会的望ましさ（中性性）の各項目群ごとに表したのが表22である。この結果から検討してみよう。

まず、男性性項目では、「22.考え方が分析的である。」を除いて 19項目で第2因子に負荷し、「Ⅱ.男性性」と命名できるのではないだろうか。女性性項目については、男性性項目よりも負荷している項目にばらつきはあるが「8.はにかみやである。」「14.おだてにのるほうである。」「20.女性的である。」など5項目を除いて第1因子に負荷している。どの因子にも負荷していない、あるいは第3因子に負荷している項目についてみると男性性項目の「40.男性的である。」が第2因子に負荷しているのに対し、「20.女性的である。」はどの因子にも負荷していない。現代社会において一般的にあらゆる面で積極的、活動的になってきている女性に対して、「女性的である。」という響きは「ひと昔前」の伝統的なステレオタイプの女性像をイメージさせるものであると考えられ、どの因子にも負荷しなかったのではないだろうか。女性性項目になっている「14.おだてにのるほうである。」や「47.だまされやすい。」など3項目は、女性性項目というよりもむしろ社会的望ましさ（中性性）項目と解釈した方が望ましいのではないか。社会的望ましさ項目群については、3因子すべてに負荷しているが、肯定的項目は第1因子に、否定的項目は第3因子に負荷しているものが多いことから第1因子を女性性の因子と仮定するならば肯定的な社会的望ましさ項目は、女性性項目とも考えられる。これらのことから各因子を「Ⅰ.女性性－肯定的中性性」、「Ⅱ.男性性」、「Ⅲ.否定的中性性」と命名した。

しかし、性役割3スコアのそれぞれの項目群で負荷量の高い因子が異なるのはBSRIの邦訳が抽象的で被験者に理解されにくかったのではないかと考えられる。また、本研究の目的の1つであるBSRIを日本に適用することの可能性については、アメリカで開発されたBSRIをそのまま邦訳し使用するよりは、BSRIをベースに日本独自の性役割スケールを開発、作成することがより望ましい。

【 結 論 】

青年期の性役割形成について考えてきたが、特に性役割同一性は男女ともにAndrogynousが多く、Undifferentiatedが少ないこと、及びFeminineが男女ともに多いことが、本研究の結果から示されている。

これらの結果から考えると、従来までの研究でいわれてきた性役割同一性は、UndifferentiatedからFeminine、Masculine、Androgynousという発達過程をたどるという仮説は、男女に等しく当てはめていうことはできないのではないだろうか。本研究の結果にこれまでの伝統的性役割の習得、すなわち男子に男性性役割、女子に女性性役割が高くなるという結果と両性性役割の概念とを合わせて考えてみると、無性性的性役割同一性（未分化な性役割同一性）から同性性的性役割同一性（男子では男性性的性役割同一性、女子では女性性的性役割同一性）がまず習得され、その上に異性性的性役割（男子においては女性性的性役割同一性、女子では、男性性的同一性）が包含され最後に両性性的性役割同一性として統合され则认为られるのではないだろうか。

【今後の課題】

本研究を終わるにあたり、すでに述べたようにいくつかの解決すべき問題点があげられる。

- 1) 本研究で使用した被験者は、同一年齢層であり大学生でしかも学部・学科にも偏りがあった。そのため、性役割同一性の様相が曖昧になったのではないかと考えられる。今後、多様な学部学生を対象にすること、さらに大学生以外の集団を対象に研究するなら、より明確な結果が得られるのではないだろうか。
- 2) 本研究で使用したBSRIは、Bemがアメリカで開発したものをそのまま邦訳したものであったが、日本で新たな性役割スケールの開発が望まれる。

謝 辞

本研究を行うに当り、機会を与えていただきました福井秀加学長に深謝いたします。

また、ご指導頂きました追手門学院大学文学部井上知子教授、さらに、資料の分析にご協力頂きました追手門学院大学文学部三川俊樹講師に厚くお礼申し上げます。

〔引用文献〕

- 1) Erikson, E.H., 1959, *Identity and the life cycle*. Psychological Issues.
(小此木啓吾 訳編 1973 アイデンティティとライフサイクル 誠信書房)
- 2) 福富護, 1983, 性の発達心理学, 福村出版
- 3) 稲垣知子, 1970, 性役割の習得過程, 津留宏編, 性差心理学, 朝倉書店, 第6章, Pp.130-148
- 4) 柏木恵子, 1973, 現代青年の性役割の習得, 依田新他編, 現代青年の性意識, 現代青年心理学講座5, 金子書房, 第3章, Pp.101-139.
- 5) 井上知子, 1986, 性役割の概念と測定について, 追手門学院大学20周年記念論集—文学部編, 17-27.
- 6) Bem, S.L., 1974, The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42 155-162.

青年期における性役割形成についての研究

- 7) Spence, J. T., & Helmreich, R. I., 1979, On assessing "Androgyny". *sex Roles*, 5 721-738.
- 8) Well, K., 1980, Gender-role identity and psychological adjustment in Adolescence. *Journal of Youth & Adolescence*, 9 59-73.
- 9) Bem, S. L., 1977, On the utility of alternative procedures for assessing psychological androgyny. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, 45 196-205.

〔参考文献〕

- 東清和・小倉千加子, 1984, 性役割の心理, 大日本図書.
- 東清和, 1989, 男性性・女性性と性格, 依田明編, 性格心理学新講座 2 - 性格形成 -, 金子書房, 第 3 編, 第 7 章, Pp. 248-264.
- Bem, S. L., 1981, *Bem Sex-Role Inventory : Professional Manual*. Consulting Psychologists Press Inc.
- Brooks-Gunn, J., & Matthews, W. S., 1979, *How children develop their sex-role identity*. (遠藤由美訳, 1982, 性別役割—その形成と発達—, 家政教育社)
- 福富護, 1981, 青年と性, 藤永保他編, 青年心理学, テキストブック心理学 (5), 有斐閣, 第 5 章, Pp. 47-58.
- 福富護, 1985, 思春期の性と行動, 福村出版.
- 井上知子, 1989, 女性と男性のありかた, 井上知子他著, 生き方としての女性論, 嵯峨野書院, 第 5 章, Pp. 121-153.
- Money, J., & Tucker, P., 1975, *Sexual signatures, On being a man or a woman*. (朝山新一他編, 1979, 性の署名, 人文書院.)
- Prager, K. J., & Bailey, J. M., 1985, Androgyny, Ego development, and psychosocial crisis resolution. *Sex Roles*, 13 525-536.
- 清水弘司, 1989, 青年期, 依田明編. 性格心理学講座 2 - 性格形成 -, 金子書房, 第 2 編, 第 4 章, Pp. 106-120.
- Siem, F. M., & Spence, J. T., 1986, Gender-related traits and helping behaviors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51 615-621.
- 鏑幹八郎他編, 1984, 自我同一性研究の展望, シンポジウム青年期 3, ナカニシヤ出版.
- Waterman, A. S., & Whitbourne, S. K., 1982, Androgyny and psychosocial development among college students and adults. *Journal of Personality*, 50 121-133.
- 芳田茂樹, 1985, 青年期における性意識に関しての心理学的研究. 追手門学院大学文学部卒業論文.
- 芳田茂樹・井上知子, 1988, 大学生における性役割獲得の様相について, 関西心理学会 第100回大会発表論文集, 21.

付 記

本研究は、追手門学院大学大学院文学研究科に提出した修士論文(1987)の一部を加筆修正したものである。